

聖書：ローマ 1：22～32

説教題：行くがままにさせる

日時：2015年4月19日

18 節で私たち人間のことが「不義をもって真理をはばんでいる人々」と表現されました。人間は一体どんな真理をはばんでいるのでしょうか。それは神についての真理です。20 節：「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はつきりと認められる」。造られたものには、それを造った人の性質が刻印されています。バッハが作った曲にはバッハの思想や特徴が、ゴッホが描いた絵にはゴッホ自身が刻まれています。それと同じように、この世界のあらゆる作品には、これを造られた神ご自身が証しされています。ですから私たちは毎日、神の作品がずらっと配置されている巨大な博物館の中を歩き、生活しているようなものです。「博物館」と言うと、展示されているものが死んでいるという印象を与えるなら、神の生けるみわざが今も生き生きと上演されている「劇場」の中で生活していると言っても良い。ところが人間はこの明らかに示されている真理を受け入れず、これを拒否し、否定し、退けていると言われました。そうさせているのは人間のプライドであり、罪です。この真理を認めると主権者なる神に従わなければならない。へりくだらなければならないそれが嫌なので、これを別の仕方の説明し、解釈しようと努める。そして神に感謝をせず、神に栄光を帰すこともしない。

そのために 21 節では「その思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった」とありました。真理を否定し続ける結果は、真理が本当に分からなくなるということです。ですから私たちがこの御言葉を聞いて、果たしてこの世界のどこに神の力強い証明があるだろうか、私にはさっぱり見えないし、良く分からないと言うなら、自分の霊的な目が本当に大丈夫なのかどうかを疑わなくてはならないということです。私の心が頑なであるため、その心が暗くなっているだけではないのか、と。にもかかわらず、現実の人間は、自分は知者であり、賢いと高ぶるのです。そういう人間はどこに向かって進むかが今日の箇所を示されています。三つのことが述べられています。

まず第一に真理をはばむ人間が進む先は偶像崇拜です。23 節：「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました。」人間は創造者を否定した結果、この世の被造物をあがめることに向かいます。世界の民族を調べて分かることは、宗教のない民族はまず見つからないということ。外部と隔絶された地域に住む人たちの間にも、必ず宗教的なものが見られます。なぜ人間は誰かに教えられなくても自然と神を祭り上げ、これを拝もうとするのでしょうか。それは人間にはカルヴァンが

言う「宗教の種」が植え付けられているからです。人間は神との交わりにおいて生きる者として造られていて、神を求める性質が人間に本質的なものとして植え込まれています。ですから真の神を否定しても、他の何かを拝まずにいられない。時にその対象は太陽、月、星といった天体です。時にその対象は人間の英雄であり、天才であり、偉人です。また時にそれはご先祖様です。また時に人々はここにあるように、鳥、獣、はうもののかたちに似たもの、ライオン、蛇、竜、ネズミ、キツネ等の像を拝む。これらに加えて今日の人々には、お金や性、名誉なども偶像の一種でしょう。

このような人間に対して神は怒りを下されます。その方法は24節のように「それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡す」というものです。真理を拒絶した人間をさばく神の方法は、彼らを選んだ罪とその結果とに彼らを引き渡し、行くがままにさせるということです。私たちはここに重大な教えを聞きます。それは通常、神は私たち罪人がさらなる悪に進むことがないように、恵みの手をもって引き止めて下さっているということです。これ以上、人間の罪が暴走し、あるいは結集してこの世が地獄と化すことがないように、隠れた御手を持って抑制し、支えて下さっている。しかし私たちがあくまで神に逆らい、神の御手から逃れたい、私は自由になりたいという態度を取るなら、神はその手を離されるのです。するとどうなるでしょうか。人間はいよいよ自由になって、自分の欲望のままに突っ走ります。まるで綱につながれていた獐猛な犬が、その綱から解かれた瞬間に駆け出して行ってあちこちで問題の行動を起こすようなものです。人間は妨げが取り除かれ、したい放題の生活へ突き進み、「これこそ自由だ、これを私はしたかったのだ！私は自分のしたいことをして生きている！」と叫ぶでしょう。しかし実はそこに神のさばきが行なわれている。神は彼らを彼らが望む罪とその結果とに引き渡すことによって、彼らへのさばきを始めておられるのです。

その彼らはどこへ進むでしょうか。二つ目にパウロが語っている領域は性的不道徳です。24節に「互いにそのからだをはずかしめるようになった」とあります。人間の欲望の歯止めがはずされると、まず生じるのが性的な領域における混乱です。「性」は本来良いものとして聖書で語られています。それは神が与えて下さった祝福であり、聖なる喜びを味わうためのプレゼントです。しかし私たちは神を退けて心が暗くなると、この恵みのプレゼントを悪用・乱用し始めます。そして本来の用途とは違う使い方、みだらで倒錯した使い方をすることへ進むのです。私たちの周りには何とそのような性があふれていることでしょうか。人々はこの結果、取り返しのつかない災いを刈り取っています。一時の誤った快楽と引き換えに大変な苦しみを背負わされ、家族はバラバラに破壊され、人生を捨てる結果に行き着いています。そこに確かに神の怒りとさばきが示されています。

そして特にここで取り上げられているのは同性愛の罪です。26節に「女は自然の用を

不自然なものに代え」とあり、27 節には「男どうして情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり」とあります。旧約のソドムとゴモラのさばきに見られますように、同性愛は聖書の中で最も非難されている罪の一つです。創世記 1～2 章に記されていますように、神は人を男と女に造り、男と女が「一心同体」の結婚関係を持つように定められました。これが神が創造において定められた自然の秩序です。しかし神を退け、真理をはばむ人間は、この御心も拒否し、捻じ曲がった心が求める倒錯した性へと進みます。ご存知の通り、今日、世界の流れとしては急速にこれを受け入れる方向に動いています。人々は、これは従来のあり方からすれば奇妙だが、それはその人たちにとって自然なのだから、それを理解し認めてあげようという方向に動いています。しかし罪に堕ちてアブノーマルな状態となっている人間の欲求を、そのまま自然なものとする姿勢で行けば、もはや規範などというものはなくなり、人間の心が思いつく全てが許容される「何でもあり」の世界になってしまうでしょう。そしてその内、自分も試しにそれを味わってみたいと言って、その罠に陥る人々は増えるでしょう。人々はそこで、これまで知らなかった新しい喜びを自分は知った！と喜びの声をあげるかもしれません。しかし聖書が言っていることは、そこに神のさばきが始まっているということです。人々は誤った喜びに進んで行って引き返せなくなり、抜け出せなくなるのです。そして本来の性の喜びを知る代わりに、おぞましい、歪んだ喜びをエスカレートするようになってしまうのです。

真理をはばむ人間が進む三つ目の領域は 28 節以降に見られます。「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡された」。そうして 29～31 節に人間社会における様々な悪が記されています。ここに全部で 21 個の悪徳がリストされていますが、これは聖書の他の箇所もそうであるように、完全に網羅したリストではなく、サンプルとしてのリストです。最初の 4 つは一般的な罪と言えます。あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意。次の 5 つは最初のねたみと関係する罪と思われれます。ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者。そして残りは関連する様々な悪です。ここで一つ一つ詳しく説明することは致しませんが、その一つ一つを意味を考えながら心に留めていただきたいと思います。その一つの方法として、この中の何個が自分に当てはまるかを数えながら。「陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者。」よく考えると、ほとんど全部が自分に当てはまるのではないかと思えて来ます。これらは当然、お互いの関係を破壊し、自分と周りの人々に多大な不幸と災いをもたらします。

これを私たちが悔い改めるなら、まだ良いのですが、現実はどうでないというのが 32 節です。「彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知ってい

ながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」ここに人間は心が暗くなっているとは言え、このような悪は必ずいつか罰されるという知識をしっかり持っていると言われていました。誰も見ていなくても、気付かれていなくても、神は知っておられて、必ずこれへのさばきを行なわれるということをうすうす感じている。これは神が私たちがそのように造っておられるということです。だから何かあると、天罰だ！と言い、あるいはたたたりだ！などと叫ぶ。なのに人間はこの声も無視し、はばみ、大丈夫だ！うまく行く可能性もある！と自分に言い続ける。そして自分がそれ続けるだけでなく、他の人がそれをするに同意し、それを奨励し、拍手喝さいするのです。たとえば今見たリストに「陰口を言う者」とありましたが、私たちはこれが良くないことは知っています。ところが誰かが陰で他人の中傷をすると、心の中で「いいぞ、もっとやれ！」と思うのです。私が聞いてあげるからという親切心を装いながら、心の中では「もっと言え！もっと面白く言ってやれ！」と応援し、それに火をつけ、かきたて、拍手喝采する。あるいはテレビや映画では殺人や暴力、むさぼりといった様々な人間の悪が取り上げられています。それらを悲しんで、こうはしないようにしましょうというメッセージを送るならまだ良いのですが、ほとんどは見る人にただ衝撃を与えるためにだけ作られています。なぜそのようなものが作られるかと言えば、それを見たいと思っている人が多くいるからでしょう。これは悪いことだ！してはならないことだ！と言いながら、心のどこかで賛同している。そしてそれにいつしか励まされて、映画やドラマやネットの動画で見たのと同じような事件があちこちで起こっているのです。こうして私たちはお互いの罪を支持し、奨励し合い、増幅させ合って多くの悲惨と災いを自分と社会にもたらしているのです。

このようなことを指してパウロは 18 節で、神の怒りが天から啓示されていると言っていたのです。今日、私たちの社会には様々な混乱や悲惨が満ち満ちています。それは真理をはばむ人間を、神がその心の欲望のままに汚れに引き渡している状況でなくて何でしょうか。頑なな人を行くがままにさせていることでなくて何でしょうか。こうして人々はいよいよそこに突進し、自分のからだを汚し、引き返すことができない状態に自分を追いやっている。その行き先は地獄しかありません。人々は自分は知者であると言い、これぞ我々が獲得した自由だと言いながら、悲惨と滅びに向かって一直線に進んでいる様子を、私たちは見る目を持って見るなら、見て取ることができるのではないのでしょうか。そこに神の怒りが啓示されているのではないのでしょうか。

このことを知って私たちはどうすれば良いのでしょうか。私たちに望みはあるのでしょうか。私たちににとっての望みは、神は天から怒りを啓示していると共に、もう一つのことでも啓示しているということです。17 節にあった通り、福音のうちに「神の義」が啓示されているということです。パウロのここしばらくの議論は、私たちをこの「神の義」へと

連れて行くためのものです。神は私たちを救うために、尊い一人子を代わりに十字架に付け、この方に信頼する者を赦し、受け入れるようにしてくださいました。そしてその者のみが神ともう一度、正しい関係に立てるようにしてくださいました。このイエス・キリストを信じる神の義を受け取るようにと、神は福音を通して語ってくださっています。私たちはこの神の義にあずかって、偽りの神ではなく、本当の神を拝む喜びに立ち返らせて頂きたい。この神の光の中で、神に愛されている自分を発見し、また他者を発見し、この世界を喜び楽しむ歩みへ導いていただきたい。この神の啓示を退け、はばんで、一層の暗やみに突進することがないように。これ以上、引き返せなくなる道に自分を追いやることなくように。また、この神の招きに応答するのが遅過ぎたということにならないように。「きょう、御声を聞けば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない」。今日の御言葉も私たちがイエス・キリストにある救いを早くに受け取るためにと、神が私たちに与えてくださっている貴重な御言葉なのです。